「罪の奴隷から神の僕へ」

（ローマ６：15～23）　　2018.7.8

この一つ前の段落、１節から１４節までの箇所をこれまで５回に渡ってお話ししてきました。今日の15節からの段落を読みますと、パウロはまた同じようなことを語っています。くどいのは私だけでなく、誰よりもパウロ先生がくどいことをずっと語っています。

ただ、丁寧に読みますと分かりますように、パウロは全く同じことを語っているのではなく、少しずつポイントを変えながら、「救われるとはどういうことなのか」を語っています。パウロがこのように言葉を変えて繰り返し語りますのは、ローマ教会の人々に「救いの喜びの中に生きて欲しい」「福音の恵みの豊かさを知って欲しい」と願っているからであります。このくどさは、ローマ教会の人々に対するパウロの熱情の表れであろうと思います。今朝、これをパウロから私たちに対して語られる喜びの知らせとして聞きたいと思います。

今日読み始めました15節で、パウロは**「それでは、どうなのか」**と述べて、この章の初めと全く同じような設問をいたします。1節では、**「では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであろうか」**と、問いを発しておりました。その後、すぐに2節で、**「断じてそうではない」**とその考えを退けます。この15節でも、**「それでは、どうなのか。律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって、わたしたちは罪を犯すべきであろうか。断じてそうではない」**。パウロはいつも、自分が語っていることに対して生まれるであろう疑問や反論を取り上げて、それに答える形で話を進めております。

この15節は、新共同訳が聖書分かりやすいのですが―**「わたしたちは、律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯してよいということでしょうか」**。これまでパウロは、私たちが救われたのは、律法を守り行ったからではなく、よい行いをしたからではなく、ただ神の恵みによって救われたのだ、と語ってきました。これに対して起こるかもしれない質問、反論として、「それならば、私たちは罪を犯しても大丈夫、ということでしょうか?」と問う。原文はより能動的な言い方で、新改訳では、**「罪を犯そう、となるのでしょうか」**と訳しています。岩波訳聖書も、**「われわれは罪を犯そうではないか」**と訳している。どうせ、行いがなくても神の恵みによって救っていただける、どんな罪でもキリストの十字架によって赦していただける、それならば安心して罪を犯そうではないか、と言い出す人がいる。

これは、ボンヘッファーという神学者が言ったように、「安価な恵み」と呼ぶべき考え方であります。キリストの十字架の恵みを安売りしてしまっている。「キリストの十字架のゆえに、私たちは何をしても赦される、何をしても救っていただける」という都合のいい考え方です。このような問いを発する考え方そのものの中に、やはり、自分の欲望のままに生きたいと思っている人間の姿、罪に囚われている人の姿が見えてまいります。

これに対してパウロは、**「断じてそうではない」**と退けます。このパウロの拒絶は強烈で、「あなたがたは、キリスト

による救いが分かっていない。神の救いを完全に誤解しているのだ」という。この後半の段落がとても重要だと思うのは、ここに、キリスト教信仰における救いとは何かということ、大切なことを明確に語っているように思うからです。

パウロは、いつものように、「**あなたがたは知らないのか**」と16節で述べて、その問いに答える形で、福音の恵みを語り始めます。「**知らないのか**」というのは、「このことをぜひ知ってほしい、分かってほしい」という思いです。

私もここを読みながら、ここが大切だなあと思うのは、ここで言われていることが分からないために、その信仰がいわゆる“ご利益信仰”から抜け出せないでいる、ということがあるように思うからであります。キリスト教、クリスチャンであっても、他のご利益宗教とほとんど変わらない考え方をしてしまうことがありうる。「ご利益宗教キリスト派」とも呼ぶべき信仰スタイルが実際にはあるように思うのですね。私自身、牧師になってから気づいたことは、自分のこれまでの信仰はご利益信仰とほとんど変わらなかったのではないか、ということでした。これは本当に驚きでした。キリスト教信仰こそ本物の宗教だと、牧師家庭に生まれた者として思っていたのですが、でもそのスタイルは他の宗教と変わらないのではないか?と思ったときに、何だったのだろう?と、驚き仰天でありました。

パウロはここで、私たちが罪の囚われから救われるということがどういうことかを説明いたします。16節に、「**あなたがたは知らないのか。あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなるのである**」。ここに「**服従**」という言葉が繰り返し用いられていますが、この「**服従**」という言葉のギリシャ語の語源は、「聴く」という言葉です。人は、誰かの声を聴いて、それに従って生きるものです。問題は、私たちが誰の声に耳を傾けて聴くのか。パウロは私たちに指摘いたしますーあなたがたが耳を傾けている、その声の持ち主があなたがたの実質的な主人となっているのだ。そして、あなたがたは、それを語っている人の僕になっている。あなたがたは誰の僕になっているか、誰の声に耳を傾け、服従しているのか?と問う。

誰の声を聴くかによって、全ての人間は二種類に分けられる、とパウロは言います。16節、「**死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなる**」。「**死に至る罪の僕**」とは、19節では「**汚れと不法との僕**」と言い換えられています。「**義にいたる従順の僕**」とは、18節と19節で「**義の僕**」と言い換えられている。その意味するところは、「罪の僕」に対して、「神の僕」ということです。

ここで、口語訳ではいずれも「**僕**」と訳されていますが、新改訳でも新共同訳でも、「**奴隷**」と訳されています。本来、そう訳されるべき言葉です。22節で、口語訳では「**神に仕え**」と訳されている言葉も、他の訳では「**神の奴隷**」と訳されています。人間は、罪に仕える奴隷なのか、それとも神に仕える奴隷なのか、二つに一つである。罪の支配下にあるのか、それとも義の支配下、神の支配下に生きるのか。それが、「**死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕と**

もなる」（16）と言われていることです。問題は、私たちがどちらの僕、どちらの奴隷として生きるのか？ということです。

救われるということは、それまでの罪の奴隷から解放されることでした。ずっとお話ししていた前の段落では、そのことを「**罪に対して死んだ**」と表現いたしました。洗礼によってキリストと結ばれた者は、すでに罪の囚われから解放され、罪に対して死に、もはや罪の奴隷ではなくなった。

このとき、罪の奴隷ではなくなって自由になったといっても、それはもはや仕える主人がいなくなって、今度は自分が自分の主人になった、というのではない、ということですね。聖書が言っていることは、罪の奴隷から解放されて、今度は神に仕える神の僕、神の奴隷になったのだ、ということがここで言っていることです。ずっとお話ししているように、キリスト教信仰における救いというのは、私たちが仕えている主人が交代することー「イエスは主」という告白はまさにそのことを言い表します。「もはや罪が主人ではありません。イエスが主人です。私は罪の奴隷ではありません。神の奴隷、神の僕、キリストの僕です」。そのことが、7節から18節にかけては、「**しかし、神は感謝すべきかな。あなたがたは罪の僕であったが、伝えられた教の基準に心から服従して、罪から解放され、義の僕となった**」と言われています。

口語訳聖書では、少し表現を和らげて、「**僕**」と訳していますが、これは、いずれも「**奴隷**」と訳されるべき言葉であります。私たちはおそらく、「神の奴隷になる」という表現には抵抗を感じるのではないでしょうか。「**奴隷**」という言葉の響きに、力で抑圧され、支配された人間の苦しみや悲しみ、嘆き、うめきというものが聞こえてきそうな感じがするからであります。そのため、神の奴隷とか、キリストの奴隷と言われると、心情的に受け取りがたいものを感じて、これでは喜びの知らせではない、それは福音ではない、と思ってしまう。罪の奴隷から解放されたのに、今度は神の奴隷とされるのだったら、それは救いでも何でもないではないか、新たな隷属状態を生み出すだけではないか、と思う。私たちは、神の僕として生きることを、不自由な生き方だと思ってしまう。それで、一般の方がクリスチャンを見ると、何か堅苦しい、無理して生活しているように思えてしまう。

私たちが思い描く自由というものは、神さまをも含めて、自分以外のすべての存在から自由になって、何ものにも服従する必要がない、そういう自由を思い描きます。「服従」という言葉は、「聞く」という言葉から出ているとお話ししましたが、私たちの場合、どんな人の声にも聞かない、ただ自分の心の声だけに聞いて生きる。それが、私たちが思い描く自由、囚われからの解放、ということではないでしょうか。その意味では、本当は、私たちは神さまからも自由になりたい、本当は、神の声にも聴き従いたくない、そのような自由を求めていたりいたします。

そのように、神をも含めて、何ものにも縛られない、支配されない自由。それは、この私が自分の思うとおり、まさに「我がまま」に生きるということではないでしょうか。イエスではなく、自分が自分の人生の主人となって生きることを

求める。神さまをさえも退けて、自分が主人になって、自分の思いのままに生きたいと願う。このように、神と私たち人間との立場がひっくり返って、逆さまになっている姿こそ、聖書がいう罪の奴隷となっている人間の姿だと言います。

創世記3章に、最初の人アダムが罪を犯したときの物語が記されています。神さまはアダムたちに対して、**「園の中央にある木の実からは取って食べてはならない」**と言われていました。蛇がアダムとエバを誘惑したとき、**「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」**（3：5）とそそのかした。あなたは神の支配がなくても生きていける、神の声を聴くのではなく、自分の心の声に聴き従えばいいではないか、自分が主人になって生きればいいではないか、と誘惑した。けれどもそれは、サタンの声に聴き従うことであり、ひいては罪の奴隷として生きる道でした。神の支配から自由になって生きようとすることは、罪の奴隷として生きる道であります。ところがサタンはいつも、私たちの感覚をマヒさせて、神の支配からも自由になって生きることが、人間としては本当の自由であるかのように思い込ませる。そこから、罪の奴隷として生きるアダムの道が始まりました。古き人としての私たちは、神さまの支配のもとに生きることがまるで不自由なことであると感じてしまう。それほどまでに、アダムの罪を受け継いで生きている、ということではなでしょうか。

そのとき、私たちにとって神さまはどういう存在になっているか、どういう役割を神さまが果たしているのかというと、神は私たち人間の僕にされてしまっているときです。皆さんいかがでしょうか、私たちは、自分が果たして神の声に聴き従っているか、と問うことよりも、神さまは私の声にちゃんと聴いてくれていないではないか、ということのほうがよっぽど大きな問題であったりいたします。そっちのほうが気になる。そのとき、私たちは神さまを私たちの御用聞き、私たちの僕にしてしまっている。あの「サザエさん」に出てくる三河屋さんのように、「こんにちは～三河屋で～す」と勝手口から声をかけ、こちらの注文を聞いてくれる。私たちが求める神さまは、三河屋さんのような神さま。こちらの願いや思いをよく聴いて、それに従ってくださる神さま。今日お話ししている表現で言うならば、私に服従してくださる神さま。私が神の僕として生きるよりも、神さまが私の僕になって仕えて欲しい。キリスト教信仰においても、そのような信仰スタイルが起こりうる。それが、最初にお話しした「ご利益宗教キリスト派」の信仰です。

キリスト教信仰で最も大事な悔い改め、方向転換は、ここがひっくり返ること。この根本部分における方向転換です。どうしてもここがひっくり返らなければならない。私が主人となり、神を僕のようにして生きていたところから、神を主人として、私たちが神の僕として生きるようになること。ホーリネスでいう「きよめ」とは、この方向転換がいよいよ徹底されていくことだとお話しをしてきました。毎週の礼拝は、まさに繰り返し繰り返しそのことを告白します。「私ではありません。あなたこそ、私たちの主、私たちの神です」とひれ伏す。礼拝をささげ続けることだけが、私たちが神になってしまう愚かさから解放され続ける道

であります。

パウロはここで驚くべきことに、私たちが義の僕、神の奴隷とされたことを不自由なこととしてではなく、神に感謝すべきこととして、喜びの知らせとして私たちに語っています。17節に、「**しかし、神は感謝すべきかな。あなたがたは罪の僕であったが、伝えられた教の基準に心から服従して、罪から解放され、義の僕となった**」（17、18）。罪の奴隷から神の奴隷へと変えられたことを、神に感謝します、と言う。キリストを主人として、キリストに仕えて生きることを、自由を奪われることとしてではなく、私たちを囚われから解放するところの神の恵みとして受け止める。だからこそ、「神に感謝します」と言う。

なぜ、パウロが神に感謝するかといいますと、私たちが仕えるこの新しい主人は、ご自分の僕たちを生かすために、ご自分の御子の命をさえ与えてくださった主人だからです。「**奴隷**」と聞きますと、主人はその奴隷の人格や権利などを否定して、人間でありながらもまるで道具のように、非人間的な、モノ扱いをする、そういう主人をイメージいたします。ところが、私たちの新しい主人は、私たち神の僕たちを大切にし、私たちを罪の滅びから救い出すために、ご自分の命をさえ差し出してくださったお方です。私たちを愛し、私たちのことを「あなたは高価で尊い」と言ってくださって、その私たちの救いのために、ご自分の命をさえ差し出してくださるお方です。私たちを殺すのではなく、私たちを生かそうとして自分を殺しなさる方。それが私たちの主人。私たちが神に仕えるよりも先に、神さまのほうが、僕となって、私たちに仕えてくださった。しかもそれは、奴隷根性で、渋々、嫌々ながら私たちに仕えてくださったのではなくて、自ら進んで僕となり仕えてくださった。だからこそ、パウロは「神に感謝します」と言う。

そして、命をかけたキリストの献身によって、罪の奴隷から解放された者たちは、今度は自分たちを贖ってくださった新しい主人、キリストに仕えて生きるようになる。神の声に聞き、その声に従って生きることをよしとして生きるようになる。それが、22節では、「**しかし今や、あなたがたは罪から解放されて神に仕え**」と述べていることです。

この「**神に仕え**」という言葉は、新改訳などでは「**神の奴隷となり**」と訳されている。ただ、この神の奴隷というものは、主人である神さまが、私たちを重い鎖でつなぎ止めて、自由を奪って、無理やり自分のわざのために働かせるような、そのような類いのものではない。なぜなら、私たちが神に仕え、キリストに仕えて生きるのは、無理やりそうさせられるようなものではないからです。強制によるものではなく、自発的な献身のわざです。私たちの神さまは、私たちが神の僕となって生きることを決して強制はなさらない。強制されたことが、皆さんあるでしょうか。私たちのほうが自ら進んで、神のもとに私たちの身を差し出すのを神さま、待っておられる。言うならば、徴兵制ではなく、志願兵を募っておられる。どうぞこの私を、あなたの僕としてお使いください、と自らをささげる。自分の命はもはや自分のものではなく、命をかけて買い取ってくださったあなたのもの、キリストのものです。だからこそ、主人であるキリストのためにこの身をおささげして喜んで仕えて生きる。

私たちが、神の僕として神に仕えて生きることを、不自由ではなく喜びとすることができるのは、そういう自分の人生をささげても惜しくはない、本当の相手、本当の主人を見つけたからです。「ああ、このお方ならば、私の主人として、自分を委ねきってもいい、このお方ならば信頼してもいい」、そういう本当の仕えるべき主人を見つけた。だからこそ喜んでお仕えすることができる。この主人は、私たちから何かを奪い去ろうとする、搾取する主人ではなく、反対に私たちに自らを与え、新しい命を与えてくださった主人です。

毎週の礼拝で、私たちはそのお方に向かって、「あなたこそ私の主です」と告白します。週の初め、自分がどのような存在なのか、繰り返し確認するようにして、「私が主人ではありません。また、他のいかなる者をも主人として仕えて生きることはしません。あなたこそ、十字架で命を捨ててくださったあなたこそ、私の主です」と告白する。それは、罪の囚われから解放され、やっと本当の主人、人生をささげてもいい、本当の主人を見つけた者たちの喜びの告白であります。この信仰告白が、喜びの告白とためには、この主人は、ご自分の僕たちのために、命をさえ与えてくださった。私たちの人生を今も、愛と深い配慮をもって治めていてくださる。だからこそ、私たちは安心して、このあと、どうなるか私は分からない。でも私が主人となって切り盛りする必要はない。この主人にこのあとも全てお任せいたします。安心して委ねることができる。

パウロは自らを紹介するとき、いつも手紙の始めに、「**キリスト・イエスの僕**」と紹介します。「**奴隷**」という言葉です。それはパウロにとってそれは、誇らしい肩書きです。罪の奴隷から解放されて、今、キリスト・イエスの奴隷とされている。

パウロと同じように、私たちは自分の人生をかけても惜しくはない、間違いのない、本当の主人を見出した者たちではないでしょうか。このお方の声に聴き従えば間違いがない、そのことを知った者たちではないか。だからこそ、強制によるのではありません、自ら進んで、私たちは神に身をささげます。神の僕として、神の声に聴き従って生きることを、選び取っていく。「私はあなたの僕です。あなたが命をかけて買い取ってくださったあなたのものです。どうぞ、あなたのためにお使いください」。この週も、私たちはそれぞれの場所に、神の僕として生きる喜びの中に送り出されてまいりたいと思います。

お祈りをいたします。
天の父なる神さま、あなたの御名を讃えます。

自分の声に聴き従って生きることが本当の幸せだと思い込み、不自由の中に、罪の囚われの中に生きてまいりましたけれども、私たちは、キリストと一つとなり、本当に仕えても大丈夫なお方、真の主人を与えられた者たちです。この週も向きを変え、「あなたこそ私の主、あなたの声に聴いてこの週を生きます」と、御前にひれ伏す礼拝をささげます。愛する兄弟姉妹一人一人にとっても、イエス・キリストなる父なる神が主人として、お一人お一人を治め、導きをお与えください。私たちの中に、あなたに対する信頼を与え、喜んで仕える心をお与えくだ

さいますようにお願いいたします。
　今日やむをえず来ることのできないでいる方々を覚えてください。病気や弱さを覚えておられる方々、ご家族の中に弱さを覚えておられる方々がいらっしゃいますが、あなたが憐れんでくださいますように、回復をお与えくださいますようにお願いいたします。
　来週、ファミリー礼拝を行います。講師の坂本先生を祝福し、お用いください。愛する家族の上に救いの恵みをお与えくださいますようにお願いいたします。
　今日も東北教区の五つの教会、弘前、三沢、築館、仙台、福島。立てられている牧師たちを支えてください。また、私たちの教会の献身者であります千葉和幸先生とご家族の上に、遣わされております岬教会での働きの上に主の祝福がありますようにお願いいたします。
　先週末から西日本で豪雨による大きな被害が出ています。亡くなられた方々や行方不明の方々が多くおられますが、どうぞ憐れんでくださって、今、その作業のために働いている方々を守ってください。不自由な生活をしている方々の上に必要なサポートがありますように。また
これ以上、被害が広がらないように憐れんでくださることをお願いいたします。
　主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師　佐藤信人）